The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	災害復興と協働想起 ： 二十村郷盆踊り大会の事例
Author(s)	渥美, 公秀
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2011, 37, p. 321-340
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/4712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

災害復興と協働想起
－二十村郷盆踊り大会の事例－

渥美　公秀

目　次

はじめに
第１章　二十村郷
第２章　伝統的な盆踊りと二十村郷盆踊り大会
第３章　理論的準備：協働想起
第４章　二十村郷盆踊り大会が災害復興過程にもたらす意義

災害復興と協働想起
－二十村郷盆踊り大会の事例－

渥美　公秀

はじめに

災害復興研究は、被災者と研究者、それに被災地に関わる様々な人々との協働的実践を通じて、被災地の生活世界の動態を明らかにし、当該被災地はもちろんのこと、時空間を隔てた社会について、さらには、社会一般について、その「社会心理」を明らかにする理論的な試みである(渥美,2009a)。本稿では、2004 年の新潟県中越地震で被災した小千谷市塩谷集落および周辺の集落が一堂に会して開催してきた「二十村郷盆踊り大会」(2008 年～2010 年)を事例とし、災害復興過程における身体的パフォーマンスを介した協働想起の意義について論じる。

中越地震から 5 年を迎えようとしていた 2009 年 8 月 29 日、小千谷市塩谷集落の通称「大下ドーム」（重機置き場）は、異様とも言える昂揚感に包まれていた。背中に龍をあしらい「仙龍」と書かれた赤い法被、あるいは、背中に大きく赤い文字で「塩谷」と染め抜いた紺の法被の塩谷集落の人々、背中には木沢、襟元に「フレンドシップ木沢」と書かれた青い法被の旧川口町木沢集落の人々、背中と襟元に「はぁとふる荒谷塾」と書かれたピンクの法被の旧川口町荒谷集落の人々、そして、屋号をあしらった提灯をもち白い浴衣に身を包んだ旧山古志村東竹沢地区の人々が、ところ狭しと伝統的なステップで踊り続ける。中央に置かれた太鼓は、様々な色の法被の人が代わる代わる打ち、音頭はスムーズにやりとりされる。大阪大学や関西学院大学、そして、地元の長岡技術科学大学などの学生も浴衣を着たりして混じっている。踊り疲れた人々が、踊りの輪から離れ、あちらこちらで話に花を咲かせている。終了後、参加者は口々に、楽しかった、有意義な会だったと話し、興奮冷めやらぬ姿で各集落へと向かうバスに乗った。これは、第 2 回二十村郷盆踊り大会の風景である。第 2 回ということからわかるように、これは中越地震の後で始まった行事であっていわゆる伝統行事ではない。また、二十村郷というのは、塩谷など大会に参加した集落を含む一帯を指すが、後述するように、その境界は必ずしも明確ではない。被災後に、境界の曖昧な地域で始まった行事が、なぜ、それほどまでの昂揚感をもたらすのだろうか。そして、そのことは被災地の復興にとってどのような意義を持っているのだろうか。

以下では、まず二十村郷について聞き取りと文献をもとに整理する(第 1 章)。次に、

この地域の盆踊りについて紹介し、二十村郷盆踊り大会について、観察結果をまとめる(第 2 章)。続いて、二十村郷盆踊り大会を復興過程と関連づけて考察するための準備として、協働想起に関する理論的考察を挿入する(第 3 章)。最後に、二十村郷盆踊り大会が、災害復興過程に対してもつ意義を考察する(第 4 章)。

第 1 章　二十村郷

二十村郷は、小千谷市、長岡市、旧川口町、旧山古志村に分布する中山間地域の総称であり、山古志郷などと呼ばれることもある。筆者が参与観察を継続している小千谷市塩谷集落[1] (渥美,2009a)もここに含まれる。二十村郷について、少々古い文献であるが、山崎（1962）は、論文の冒頭で次のように述べている。

「越後の前山にあたる東山山脈の西南端にあたり、長岡からは 12～16 ㎞程度しか隔たっていない諸部落であるが、褶曲山地特有の複雑な地形に囲まれ、交通上の支障も大きく、かつ冬期５ヶ月間は平均３メートル余の豪雪に埋もれる僻地で、二十村といえば山村僻地の代名詞の如く考えられ、土地の人でさえ二十村と呼ばれることを好まない程である。貧弱な生活基盤に立脚した生産生活零細の自給農の域を脱し得ない。」(p.17)

本章では、文献資料[2]として、この地域の発生過程をまとめた山崎(1962)や、二十村郷の一部となっている東山地区の歴史を描いた星野(1954)を中心に、古典としては鈴木(1837)、古文書等に見られる記述については、「山古志村史」「小千谷市史」といった公刊物、および、「小千谷文化」（小千谷文化財協会）や「広域文化」（広域ふるさと文化協会）といった不定期刊行される冊子を参照する。また、聴き取り調査としては、塩谷集落で継続している参与観察で得られた記録、および、二十村郷盆踊り大会に参加した際に聴き取った記録を用いる。

二十村郷の境界

二十村郷には、文字通り 20 集落が含まれているかというとそうではない。実際、塩谷集落の住民に尋ねても、それぞれが列挙する集落名は、かなり重複しつつもズレがあり、一定しない。例えば、二十村郷盆踊り大会の計画段階(後述)から参加してきた荒谷集落が、二十村郷に含まれないとする意見さえ聞かれる。二十村郷が現在も息づいていると語る住民もあれば、過去に存在した二十村郷と現在との断絶を強調する住民もあって、時間的な境界も画定しない。おそらく人々が経験した交流の濃淡や何らかの特異な経緯によって、二十村郷として指し示す空間的時間的範囲が異なるのであろう。

文献を見てみると、近世初期の二十村郷は、虫亀六ヶ村を除いた地域で、元和 4 年（1618）の「牧野氏知行目録」では東山村、正保２年（1645）国絵図では山二十村、正

保４年（1647）検地では二十村として記録されているという。「山古志村史」では、山二十村を「正保２年（1645）の国絵図」から抽出し、木沢・塩谷・蘭木・荷頃・梶金・小松倉・菖蒲・岩間木・朝日・寺沢・中山・首沢・小栗山・油夫・大内・竹沢入・間内平・桂谷・大久保・濁沢の２０か村を指すものであったとしている。二十村郷とされる地域には、国道 291 号線が通っている。古く三国街道からの分岐点となったところには、「右二十村道　左長岡往来」と刻まれた道標がある[3]。

総括すれば、二十村郷の境界については、古くから文献にも見られるが、それは一定せず、人々の語りからも曖昧な境界が浮かび上がる。結局、どこからどこまでが二十村郷であるかということは明確には示すことができない。山崎（1962）も、二十村という言葉について、山二十村、山六ヶ村、山古志、二十村郷など様々で一定せず、幾度かの市町村合併により、そもそも二十村などの呼称は不要になりつつあると述べていることにも留意しておきたい。

二十村郷という名称

二十村郷という名称の由来について、山崎（1962）は、次の３つの説を提示している。第 1 に、「二重村」、「二度村」説である。坂牧家文の「山古志組種苧原旧来記」には、「二十村とは私家の家伝では、最初村が出来てそれが潰れ、再度移住して村ができたものが多いので二重村と申したが、何れの頃にか二十村となった」と述べられている。また東竹沢村梶金の関家文書中に残る寛文元年の山絵図からは、「昔 70 戸を超える大部落であったが、庄屋屋敷からの大火で全焼し、その時村の大部分が会津に移住したが、後 5 戸が帰って来て現在の村の草分け 5 戸になったことを記している。

第 2 に、「20 ヶ村の組合村」説がある。ここでは、発生当時独立自治村としては政治経済的の力を持たない小村であったので、幾つかの村が寄り合って年貢上納の単位とされたためとするものである。「廿六ヶ村家数改帳」には、26 ヶ村とは、朝日川筋の小栗山・荷頃・木沢・竹沢の本村・枝村 20 ヶ村を「山廿村」と称し、丁度 20 ヶ村名を挙げている。そして、太田川筋の蓬平・虫亀・種苧原諸村は「山六ヶ村」と称し、これを合わせて 26 ヶ所としたわけである。これは、発生当時の村数が二十村郷の起源であり、また当時長岡藩として確認されていた正式の村名であったことが、正保 2 年の越後絵図中にも、本地域を山廿村の内～村、山六ヶ村の内～村と記していることからも立証できるとする説である。

最後に、「北陸諸藩の冠村統治制度の一つである、十村・廿村の名残」説がある。長岡藩でも郷村統治策として、十村制度とか二十村制度など呼ばれる制度化がなされた。この制度下での 20 ヶ村を「山二十村」と称するようになったとする説である。

二十村郷の発生と相互交通

二十村郷の発生過程は、大きく 2 段階に分けられる。まず、小栗山・首沢といった朝日川の谷の集落の発生は、最も古く、現在から 1000 年以上前とされている。残りの集

落は、落人発生村と呼ばれ、次の3種がある。第1に、平氏の落人伝説村とされ、草分けまき[4]に同族共同体的性格が顕著である集落。第2に、戦国動乱期の野武士の帰農による隠遁百姓村とされ、長尾氏が、主家上杉氏を滅ぼして越後の実権を握る動乱期に、これに敵味方した地方豪族が、山村の草分けとして帰農し、落人山村を作るもとになったとされる集落。第3に、地方豪族の落人村とされ、近世領主の検地によって認知された集落である。

なお、二十村郷の発生から定着までの過程は、草分けまきの移動関係から明らかにされる場合がある。具体的には、二十村郷には「おやじ」、あるいは「おや」と呼ばれる旧家がある。「おやじ」は、庄屋家、草分けまきの総本家格にあたる家で、「おや」は、まき頭にあたる百姓をさす。姓をもつものは、武士階級か百姓では庄屋、村三役級のものとされるため、この「おやじ家」のまき構成の移動を追求していくことによって、かなり正確に集落の定着過程を知ることができるとのことである。

この地域は、冬には数メートルに及ぶ大雪に埋もれ、集落間の移動が困難になる。また、雪のない季節であっても、谷間に点在する集落間の移動は、山越えがあり容易ではない。このことは、病人が出た場合など緊急を要する時に障害となる。そこで、昭和のはじめ頃から、集落と集落を結ぶ手堀りのトンネルが掘られるようになった。昭和7年(1932年)に東竹沢の梶金と木篭を結ぶ七曲トンネル、同9年(1934年)に東竹沢と竹沢を結ぶ梶金トンネル、同24年(1949年)に広神村に通ずる中山トンネル[5]、そして同27年(1952年)には南平地区と竹沢を結ぶ羽黒トンネルが開通した。1952年からは、相次いでバス路線が新設、延長された。

二十村郷の習俗

二十村郷で共有されていた習俗には、牛の角突きや、錦鯉、天神ばやしや盆踊りがある。二十村郷では、緩やかな傾斜を開拓した棚田が多く、棚田での農作業には牛を必要とした。しかも冬は雪に閉ざされるため、足腰が強く、粗食にも耐えうる丈夫な南部牛が用いられた。その牛が、いつの頃からか、角突きの神事のルーツになったという。また、棚田を潤す水を得るために横井戸を掘り、山の地下水を引いた。地下水をそのまま使うと冷たすぎるので、棚田の一番上の段に池をこしらえ、水をぬるませた。ついでにその池で食用の鯉を飼ったのが、今の錦鯉のはじまりとなったという。さらに、横井戸を掘る技術は、先述の手掘りトンネルの技術に活かされることになった。

牛の角突き　二十村郷牛の角突き習俗保存会（1980）は、一番古い説として南総里見八犬伝の中の「闘牛は原是西戎の戯也、唐山戦国の時、胡国なる闘牛によりて角觝の戯を作れり」をとりあげている。戎、あるいは胡とよばれている人種は、蝦夷人、アイヌ人のことのようで、大陸から佐渡島に来航し、やがて越後国にも居住するようになった。紀元前8〜3世紀のことでもあるという。広井（2003）によると、越後闘牛の妙味として、西日本の闘牛との大きな違いは、「勝負づけ」をしない点にある。その理由として

は、わが子同様家族のように育てた牛が血を流し糞尿を垂れ流すまでの死闘は可哀想でできないこと、勝負づけをして徹底的に闘わせると負けた牛が懲りて再び闘わなくなること、越後闘牛は興業や賭博ではないこと、牛の犠牲を少なくし長く保有できるようにすること、勝敗によって仲間との感情を害したくないことなどが挙げられている。

昭和20年以前に行われていた角突きは、年に4回ほどで、第一回は田植えの前後、二回目は春蚕のはきたてが終わって蚕棚を払う7月20日前後、第三回目はお盆、四回目は秋の彼岸のころであった。二十村郷には竹沢、種苧原、虫亀、東竹沢村小松倉、蓬平村池谷、木沢、塩谷、小栗山の八ヶ所に角突き場があった。なかでも竹沢村二丁野などはどの村からも比較的近い角突き場をもち、牛持ちも多かったので、他の村からもたくさん牛が集った。角突きを主催する村では、その準備、進行、後始末のいっさいを村の青年がとりしきり、厩の手配や牛宿の祝い[6]を行っていた。

現在、小千谷闘牛場と山古志闘牛場では、それぞれ年7回の闘牛が行われ、番付をされた牛が相手の牛と取り組みを行う。地元の東山小学校にも1頭飼われており、取り組みに参加し人気がある。各地から観光バスでツアー客が訪れるイベントとなっている。現在の塩谷集落には、牛を飼う家が3軒あり、他にも牛を他の集落に預けている方や勢子[7]として参加する方など熱心に闘牛と関わる人々がいる。牛は東京方面などこの地域外の人がオーナーになっている場合もある。牛の勝敗は決しないし、賭博でもないが、昔は、集落の尊厳をかけて、いわば人間の勝敗を決するというムードがあったという回想も聞かれる。

錦鯉　二十村郷の文化の一つとして、錦鯉も有名である。小千谷市公民館（1997）には、「錦鯉は雪深い新潟県の山の中で作られ、食用鯉の中から突然変わったものが生まれ、それを土台にして、農家の人達が200年以上の間、コツコツと工夫をこらし苦心した結果、さまざまな品種が作られ、現在のような華麗な錦鯉が誕生した」と述べられている。この錦鯉という呼び名は、昭和32年頃からで、それ以前は「色鯉」、さらにさかのぼっては「変わり鯉」「花鯉」などと呼ばれていた。また、同書は、「錦鯉の生産地としては、古志郡山古志村を中心として、それに接する小千谷市、長岡市、栃尾市、見附市、川口町、堀之内町、広神村、小出町の一部でまさしく古志郡山古志20村郷とよばれていた地域である」とし、中でも、小千谷市塩谷では、「天明の飢饉に、日照り続きのため、池が干上がり、鯉がつきづきに死にはじめたのを見かねて、仙龍神社の池に移し、滅びることを免れた」と伝えている。

錦鯉は、高度成長期頃から産業としてこの地域に与えた影響も大きい。ここでは、錦鯉が高価で取引されることもあり、貴重な現金収入となったこと、減反政策との兼ね合いで養鯉池が整備されるなど様々な経済的な環境に依存する経緯があったことなどを紹介するに留める。中越地震は、こうした経済的基盤をも破壊したことになる。

天神ばやし　大島（1998）によると、魚沼のほぼ全域と古志・刈羽・東頸城の一部にかけては、「天神ばやし」が、越後の代表的な祝い唄として存在してきた。天神ばやし

の歌詞は、地域により若干の差が認められるが、ほぼ同じである。天神ばやしは「大根種」とか「八幡の森」の別の名称で呼ばれたり、大きな声をはりあげて歌うので「大鳴」と呼ぶ所もある。天神ばやしの前身は、生活に密着した仕事唄だったが、天神ばやしが祝い唄として文献に表れてくるのは、明治28年であり、「昔より目出度き酒盛りの終る時、一座そろふて謡う歌を、てんじんばやしといふ。てんじんばやしの梅の花一枝手折って笠にさす、笠にさすよりも、なすざき女郎衆の手にもたす。此歌魚沼へん専らなるを以って、うおぬまてんじん囃の名あり。所によりては田かきのおり謡ふを以って田内歌の名有。」として集録されている。

現在、塩谷集落でも天神ばやしは歌われる。塩谷集落センターには、歌詞が壁に掲げてあり、田植えや稲刈りをイベントとして行った時(渥美,2009a)などには、集落外部から参加したボランティアたちを含む宴の席で歌われる。歌をリードする男性に合わせて、集落の男性が大きな声で呻吟する様子は、圧巻である。

盆踊りも、二十村郷に共通してみられる独特の習俗であるが、二十村郷盆踊り大会と絡めて、章を改めて紹介する。

第２章　伝統的な盆踊りと二十村郷盆踊り大会

伝統的な盆踊り

盆踊りは、元来、二十村郷の各集落でそれぞれに開催されていた。しかし、各集落が閉鎖的に行うものではなく、互いに訪問して踊るという交流の場であった。今でも盆踊りの日が集落ごとに重ならないように設定されているのはその名残である。踊る場所に関しては、各集落の鎮守の境内が最も多く、その他、寺の境内、小･中学校のグラウンドなどがあげられる。

塩谷集落での聴き取りによれば、別の集落の盆踊りの日には、塩谷集落から男女が目的地別に集団を組み、集落を(歩いて)訪れる。集落の手前まで来ると新調した下駄を履き、「木遣り」という歌を歌いながら集落に入る。塩谷からの客が到着したことを知ったその集落では、丁重にもてなし、踊りへと導く。踊りは男女交流の場でもあり、「おめさん、だいこのたねうえたか（あなた、もう大根の種を植えましたか)」と話しかけると、「おら、もううえたいやぁ（私は、もう植えましたよ)」と応えることから会話が始まるという話はよく耳にする。無論、お目当ての異性との交流がスムーズにいくかどうかは、未知数であったという。中越地震以前から、集落によっては人数が不足して盆踊りが実施できないところもあり、盆踊りを通じた集落間の交流は見られなくなっていた。二十村郷の集落間の交流を実際に体験しているのは、高度成長期に育った世代以上が中心である。彼らに二十村郷の集落間で行われた盆踊りを通じた交流について尋ねれば、遠くを見る目で、失われた交流を懐かしく語ることがしばしばである。

関口（1992）[8]によると、盆は正月とともに日本の二大年中行事の一つとして、古来より宮廷から庶民に至るまで広く行われてきた祖霊祭とされている。現在伝承されている各地の盆踊りは、文献上江戸時代中期以降のものがほとんどであり、それぞれにその土地の特色や歴史を感じさせるものがある。二十村郷の盆踊り唄である「よいようさ」[9]は、江戸時代中ごろより新潟県魚沼地方で広く歌われてきた。場所によっては「よいやさ」「よいよさ」「よいやな」などとも呼ばれている。中・南魚沼地方では「よいやさ」が多く、北魚沼地方では「よいよさ」あるいは「よいようさ」である。この唄の発祥は不明であるが、魚沼地方の盆踊り歌「神保広大寺」よりでた越後口説の変化したものとする説と近世の初期に江戸に流行した「弄斎節」が移入されたとする説がある。歌詞は七七調をくりかえすもの、あるいは七五七五調の口説き歌できわめて長編のものが多いのが特徴である（塩谷集落で歌われている「よいようさ」は Appendix 1 に示す）。

「よいようさ」に伴う太鼓や踊りは、二十村郷の各地で共有されている。無論、それぞれ核となる部分の共有であり、集落ごとのヴァリエーションはある。また「よいようさ」の音楽表現に関して、盆踊りは、一般的にはやぐらの上で打ち鳴らす笛や太鼓の伴奏を伴うものであるが、「よいようさ」は太鼓のみである。しかも、むしろ音頭取りによる歌と、踊り手の手拍子、足音、ハヤシなどが主となって音楽効果を表すものである。従って、音頭取りの才覚が、踊りの盛り上がりを左右する。

二十村郷盆踊り大会

二十村郷盆踊り大会は、2008 年 8 月 24 日に木沢集落で初めて開催された。前節で示した通り、盆踊りは、元来、集落間の交流の場ではあっても、集落ごとに行われていたため、複数の集落が主催して盆踊り大会をするようなことはなかった。また、前章で紹介した通り、二十村郷盆踊り大会といっても、二十村郷そのものの境界は曖昧である。実際、二十村郷盆踊り大会と銘打ってはいても、中心となって企画したのは、小千谷市塩谷集落、旧川口町木沢集落、同荒谷集落、旧山古志村東竹沢地区の有志であり、共通点は、それらの集落で「よいようさ」が歌われていること、昔、盆踊りを通じた交流があったことをある程度の人々が記憶していることという 2 点だけである。さらに、二十村郷盆踊り大会の発案は、実は、外部ボランティアである。ただし、発案者が顕在化しない行事として始められ、第 1 回大会が成功したために、現在では、企画に加わった集落が順番に開催するという流れになってきている。

塩谷集落からは、第 1 回二十村郷盆踊り大会に 11 名が参加した。18:30 からの酒宴に続き、19:00 から踊りが始まり 21:00 頃まで続いた。木沢集落や荒谷集落では中越地震からの復興過程において形成された有志の集団がもつ青やピンクの法被、塩谷集落は赤の法被（鎮守に由来）や青の法被、そして、旧山古志村東竹沢地区（の梶金、木篭、小松倉各集落）からは屋号をあしらった提灯を掲げて浴衣での参加があった。木沢集落では事前に周知された結果、日頃は集落の行事に出席しない高齢の住民も出席して楽しんだ。

各集落の人々が代わる代わる歌い、太鼓を叩き、各集落の支援者も加わって、全身に汗をかきながら踊り続ける場は、他の復興過程では決して見られなかった“異様な”昂揚感に満ちた場となった。終了後も、興奮冷めやらぬ住民と支援者・研究者が口々に素晴らしい交流だったと述べ、太鼓や唄の良し悪しを論じていた。翌 2009 年 8 月 29 日に第 2 回が塩谷集落で開催されたところ、本稿冒頭に示したような場が形成された。さらに第 3 回は 2010 年 8 月 28 日に荒谷集落で開催され、同様の場となり、翌年の東竹沢地区での開催が決まった。

二十村郷盆踊り大会が、なぜこれほどまでの昂揚感に満たされるのであろうか？またそこに見られる昂揚感は、この地域の復興過程にいかなる影響を及ぼすのだろうか？これらのことを考察するための準備として、協働想起（渥美、2003,2004）という概念を導入しておく。

第３章　理論的準備：協働想起

心理学の伝統的な考え方によれば、記憶は、脳や身体内部に貯蔵された情報とその個人的な再生である。記憶には、コード化、貯蔵、検索という 3 つの段階があると考えられ、認知心理学において現在まで様々なモデル化が図られてきている。この立場に立てば、記憶の伝承とは、皮膚界面内にコード化されて貯蔵された情報を検索して取り出し、外界の媒体を通じて、相手の皮膚界面内にコード化を引きおこしてそこに貯蔵されることにほかならない。

もちろん、こうした伝統的な心理学に基づく考え方に対して、異を唱える動きも、古くからあった。まず、記憶は貯蔵された静的な痕跡ではなく、想起という行為であると捉える動きがあった。具体的には、Bartlett(1932)が先鞭をつけ、日常的な場面での記憶へと目を転じさせた Neisser(1982)、Halbwachs(1950)の集合的記憶（collective memory）論を経て、Pennebaker, Paez, & Rimé(1997)らの歴史的記憶の研究、Middleton & Edwards(1990)や Wertsch(2002)による集合的想起(collective remembering)の研究へとつながる流れである。わが国でも、裁判をフィールドとして展開する供述心理学の成果（e.g.,大橋・森・高木・松島,2002）などがあり、「語り部活動」の研究（e.g.,高野・渥美,2007）も集合的な想起研究の 1 つと位置づけることができる。これら諸研究は、決して身体内の貯蔵情報には回収されない記憶とその伝達を論じている。

協働想起(collaborative remembering)

設計物語科学としてのグループ・ダイナミックス(Atsumi,2007)は、集合的な想起に見られる何らかの法則を発見しようとするのではなく、特定の文脈をもった現場で当事者と協働しながら、何らかの変革を求めて想起を行う。言い換えれば、何かを当事者とともに想起するというときには、想起自体が協働的実践(渥美,2006a)の一部であり、何らかの

変革に向けた目標が伴っている。こうした協働的実践の一部として行われる想起を、単に複数の人々が想起するという意味での集合的想起と区別して、協働想起(collaborative remembering)と呼んでおく。

協働想起の特徴について整理しておこう。ただし、ここでは、二十村郷盆踊り大会の分析への準備という性質上、できるだけ災害研究から事例を示しながら、本研究に関連する事柄だけを抽出する。

まず第1に、協働想起には、定義上、想起の目標が伴っているとしているが、目標が想起の後から理解される場合もあることに注意しておきたい。協働的実践においては、ある実践を行ってから、事後的に目標が認識される場合があり、Atsumi(2004)では、災害ボランティアの動機を問う場面において事後的に認識される心的過程を論じている[10]。

第2に、協働想起は、通常、過去の出来事に関する想起であるが、出来事について、いわゆる客観的な真実・真偽を問うことに関心のある概念ではない。実際、同一人物たちによる協働想起であっても、その時その場で対話として遂行されるので、想起される内容も形式も異なってかまわない。協働想起への参加者が異なれば、さらに異なる想起が行われる。Miyamoto & Atsumi(審査中)は、「復興曲線」というツールを開発して復興過程を分析しているが、その聞き取りの場面を、聞き取りを行う研究者と、復興過程を語る被災者との協働想起として把握している。

第3に、想起という言葉からは奇異に聞こえるが、協働想起には、未来を想起するという現象がある。例えば、協働的実践の一環として、将来のある時点での出来事を想定し、その時点に身を置いて、現在を想起するという場合がある。実際、ロマ・プリエータ地震(1989)で被害を受けたサンタクルーズ市のダウンタウンの復興過程において、こうした協働想起が用いられたことが知られている（災害復興制度研究所,2009）[11]。

第4に、協働想起は、通常、言語による対話によって行われるが、歌や踊りなどのパフォーマンスを介した協働想起もある。同窓生と校歌を歌ったり、学校行事で練習した踊りを再現したりする場面で生じる一体感を求めた想起は、誰しも経験していることでもあろう。災害に関することでは、各地で展開されつつある「防災体操」など（e.g., 神戸市消防局、神戸市教育委員会,2009）はここに分類できよう。

最後に、協働想起は、協働的実践の過程において自然に生じるだけでなく、意図的、戦略的に生じさせることを試みる場合がある。典型例として、慰霊碑や博物館での取り組みがある。災害に関する展示施設は世界各地にあり、最近では四川大地震の被災地に開設された展示施設について、渥美・矢守・鈴木・近藤・淳于　(2009)や矢守(2009)などが分析している。また、今井(2001)は、慰霊碑を詳しく分析している[12]。

協働想起は、人々が何らかの(後付けかもしれない)目標に向けて、協働的実践の一部として行う、広義の対話を伴った集合的な想起である。ここで提示した特徴を念頭において、二十村郷盆踊り大会を考察してみよう。

第４章　二十村郷盆踊り大会が災害復興過程にもたらす意義

二十村郷盆踊り大会は、中越地震で被災した地域の人々が、目標を顕示するかどうかは別として、復興過程において展開してきた協働的実践の一部である。ここで前章で準備した理論的枠組みを用いて、二十村郷盆踊り大会で見られた異様なまでの昂揚感を考察してみよう。

まず、二十村郷盆踊り大会は、復興に向けて、過去を協働想起する場であった。二十村郷盆踊り大会の場は、「よいようさ」という盆踊り唄や踊りなどを通じて、互いに共有する歴史や思い出を確認し合う場であった。協働想起は、出来事について、いわゆる客観的な真実･真偽を問うことに関心のある概念ではないと指摘しておいた。事実、第2章で紹介したように、二十村郷そのものの境界さえ曖昧であった。従って、二十村郷盆踊り大会は何も客観的事実＝史実としての過去を協働想起したわけでなく、創作的な過去をも含む協働想起の場となったのであろう。

では、二十村郷盆踊り大会を通じて過去を協働想起することによって、あれほどの昂揚感が生まれたのはなぜだろうか。中越地震では、集落全体が避難を余儀なくされたり仮設住宅の生活から集落に戻る人と戻らない(戻れない)人とが生まれたりした。このことは、過去には存在していたであろう集落としての一体感を阻害したと思われる。事実、塩谷集落では、地震から5年以上を経過した時点でも、一体感を希求する声は聴かれる（渥美,2009a）。二十村郷盆踊り大会を通じて、一体感をもっていた過去を協働想起することによって、中越地震が破壊した過去との連続性が(擬制的、虚構的であれ)回復されたから、あのような昂揚感が生まれたと言えるのではなかろうか。

次に、二十村郷盆踊り大会は、復興に向けて、未来を協働想起する場であった。第 1章で紹介したように、二十村郷盆踊り大会に参加した集落は、震災以前から、行政上の区分（小千谷市、山古志村、川口町）に分かれて、互いに独立した別の集落として活動してきた。中越地震以降、それぞれに外部ボランティアが長期的に関わって、住民を主体としたユニークな復興作業に取り組んできたが、これも各集落独自の展開が主であった(渥美,2006b)。また、震災からの復興過程において、各自治体もそれぞれ独自の施策を展開してきた。その結果、住民が、行政区画を超えて協働する理由もきっかけもないのが現状であった。確かに、闘牛を通じた交流はあったし、錦鯉や天神ばやしという文化を共有してはいたが､第2章で示したように､集落間の交流の場としての盆踊りでさえ、各集落で個別に行われていたのであって、二十村郷として一堂に会する形式で開催されることはなかった。従って、中越地震というこれまでになかった体験を共有しているとはいえ、それは各集落内部に留まり、その経験を相互に交流して、協力しながら復興していくという姿勢はなかなか得られないのが現状であった。

例えば､被災地復興の中間組織として成立した中越復興市民会議(渥美,2006b)が開催する地域復興に関するイベントも、各集落の復興を提示し合う中での交流を目指してはい

るが、ともすれば、互いの復興状況を競い合うようなムードがなかったとは言えまい。無論、各集落が切磋琢磨することがモチーフであるから、何もこのイベントに非があるわけではない。しかし、被災した集落群の一部が、過去に共有していた事柄を共に想起することを通して、集落の未来を考えていこうという場はなかなか育たなかったのである。

それに対し、住民自身が、二十村郷という文化－歴史的な範囲に照準し、一堂に会する盆踊りを企画し、実施していくことは画期的であった。それは、今後の復興において、自治体の境界とは独立に、住民が主導して(二十村郷という曖昧な)文化－歴史的な地域の未来を展望する契機となった。実際には、復興を遂げた地域の姿が現時点で具体的に展望されたわけではないが、展望される未来から現在の二十村郷盆踊り大会を協働想起する場であっただろう。

未来を協働想起することが、昂揚感へとつながることは自然である。すなわち、上述したように、目に見える成果の乏しいまま進んできた復興過程に閉塞感が漂う中で、二十村郷盆踊り大会を企画し、開催できたことは、復興を遂げた未来を展望し、その姿へと変貌していく希望と結びつき、昂揚感が生まれたのではなかろうか。

最後に、二十村郷盆踊りが、踊りや盆踊り唄という身体的パフォーマンスを伴った協働想起の場であったことを指摘しておきたい。二十村郷盆踊り大会には、踊り、歌、太鼓が共鳴するパフォーマティブな場が現出していた。さらに、各集落で復興支援を展開している外部ボランティアや研究者もただただ踊り続け、太鼓を打ち鳴らしたのであった。

では、身体的パフォーマンスによる協働想起が、これほどまでの昂揚感を生みだしたのはなぜだろうか。ここでは、“言語化の一時停止”という考え方を導入して考察したい。研究者をはじめとする外部支援者は、ローカルな現場で出会う様々な事象を言語化する。正確には、外部支援者は、すでに現場に堆積していながらも言語化を遂げていなかった事柄を言語化する（宮本・渥美・矢守、審査中）。そして、他のローカルな現場へと知をつなげていくことを使命とする。ところが、二十村盆踊り大会では、そういった外部支援者もただただ踊り続けた。確かに、研究者は、二十村郷盆踊り大会を言語化し、それが他のローカルな現場に伝わる可能性を追求する(本稿もその１つと考えたい)。しかし、二十村郷盆踊り大会の、その時その場で、研究者自身が踊り続けたことは無意味だったのではない。研究者は、言語化の営みを一時停止し、一緒になってパフォーマンスを通じた協働的実践を行っていたわけであり、その姿そのものが、他の研究者や外部ボランティア、そして、何より、当事者の目に映り、脳裏に残ることが、今後のインターローカルな展開へとつながる可能性がある。それを自覚するからこそ、研究者もただただ踊り続けたわけである。中越地震からの復興に関する様々な言説（復興計画やイベントも含む）、共有される歴史や文化、展望される未来といった様々に協働想起されることを越えて、ただただ踊り続けるという身体的パフォーマンスを介した協働想起が、生の燃焼とでも形容される昂揚感として広がっていったのではなかろうか。

渥美(2009a)では、被災者自身によって書かれた手紙を題材に、これからの人間科学に

おいて、詩的言語を積極的に射程に入れることを提唱しておいた。本研究では、二十村郷盆踊り大会を通して、過去に関する協働想起、未来に関する協働想起を伴って、身体的なパフォーマンスが災害復興へとつながる可能性に注目した。ここから、理論的課題と実践的課題を１つずつ指摘して本稿を閉じることにする。

まず、月並みな指摘に見えるが、身体的パフォーマンスを射程に入れた理論構築が求められる。詩的言語や身体的パフォーマンスへの着目は、もちろん、研究者もパフォーマンスができる方が現場に受け入れてもらえるなどと陳腐なことを言いたいわけではない。そもそも、言語化を通して、インターローカルな知の交流を促すことが研究者の役割であることは当然である。ただ、パフォーマンスが、そうした解釈を越えて復興へとつながる以上、言語化は、協働的実践を通じてインターローカルな知を促す回路の“1つ”であると考えておくべきであろう。二十村郷盆踊り大会の事例が示唆する通り、研究者自身が言語化を一時停止し、パフォーマンスに没頭することにもローカルおよびインターローカルな意義があるからである。詩的言語や身体的パフォーマンスによる回路をいかに位置づけるかということを理論的課題として指摘しておきたい。

実践的には、災害復興過程において協働想起を意図的、戦略的に用いることを考えたい。二十村郷盆踊り大会は、現時点では確かに成功している活動であるし、本稿で試みたような解釈は成立するものと考えたい。ただ、人々が行うある活動を見て、それを理論的に解釈しているだけでは、「設計」物語科学を標榜するグループ･ダイナミックス研究としてはいかにも魅力に乏しい。本研究で論じた事例をもとに、協働想起を災害復興のツールへと転換し、様々な現場の復興過程に寄与することを実践的課題として指摘しておきたい。

［注］

1　塩谷集落の復興過程については、渥美(2009a)を参照。

2　古文書等については、これらの文献からの二次利用である。必ずしも参照箇所を明示していないことを断っておく。

3　ただし、現在、道標が置かれている位置は当時とは異なるようである。

4　古代の氏族、近世の本家・分家の関係など、同一の血族団体。「まき」は現在でも使われる単位。塩谷集落の場合、冠婚葬祭の単位でもあり、共通の祠（内鎮守）を祭っていたりする。

5　映画「掘るまいか　手掘り中山隧道の記録」(2003 年)に描かれている。

6　牛宿になった家では、角突きの牛が来ると、自分の牛と同様に大切に取り扱い、面網、鼻縄、曳き網を神前に供え、また御神酒も供えた。特に、横綱級の牛を迎えるときは、その村の中核的な家が牛宿をつとめる場合が多く、最上級の接待をうけたようである。

7　勢子とは、闘う牛をとりおさえる人である。二十村郷牛の角突き習俗保存会（1980）は、「勢子には網掛けを専門とする者と、牛を捕まえる事を主として行

う勢子の二種がある。いずれも秘術的な技術を必要とする技師である。常に危険が伴い、一瞬をあらそう秘術にて、観る者にも手に汗を握らせる。また肝玉が冷えるような場面に遭遇することが多く言葉では名状しがたい。またこの勢子も二組に分かれてお互いに自分の牛、贔屓する闘牛の相手方の牛を捕まえるのが二十村郷の習俗である。」と述べている。

８　出典不明の文献を用いることには躊躇するが、小千谷市図書館でも出典不明として扱われているため、そのように記した。おそらく寄贈された断章だと思われる。

９　本稿では、塩谷集落での呼称にしたがって、このように記す。

１０　心的過程が事後的に認識されることの論理構成は、Gergen(1994)に詳しい。

１１　物語復興と呼ばれる。渥美(2009b)では、このプロセスをヒントにしたツールの存在も紹介している。

１２　なお、展示と記憶の関係についてはクレイン(2009)や笠原・寺田(2009)がある。

参考文献

渥美公秀　(2003) 記憶の伝承に関するグループ・ダイナミックス　大阪大学２１世紀COE「インターフェースの人文学」報告書

渥美公秀　(2004)　語りのグループ・ダイナミックス：語るに語れない体験から　大阪大学大学院人間科学研究科紀要,**30**,161-173.

Atsumi, T. (2004) Socially constructed motivation of volunteers: A theoretical exploration. *Progress in Asian Social Psychology*, **4**, 13-17.

渥美公秀 (2006a) 協働的実践の成果表現における三層：減災コミュニケーションデザイン・プロジェクトを事例として　*Communication-Design*,**1**,171-189.

渥美公秀　(2006b)　モードの交替運動としてのフィールドワーク：新潟中越地震の事例 *SYN*（大阪大学大学院人間科学研究科ボランティア人間科学講座紀要），**7**, 5-16.

Atsumi,T. (2007) Aviation with fraternal twin wings over the Asian context: Using nomothetic epistemic and narrative design paradigms in social psychology. *Asian Journal of Social Psychology*,**10**,32-40.

渥美公秀(2009a)　災害復興過程の被災地間伝承：小千谷市塩谷集落から刈羽村への手紙 大阪大学大学院人間科学研究科紀要,**36**,1-18.

渥美公秀 (2009b) コミュニティの非日常から日常へのダイナミックス　上町台地コミュニティ・デザイン研究会（編）　『地域を活かすつながりのデザインー上町台地の現場から』　創元社　pp. 34-55.

渥美公秀・矢守克也・鈴木勇・近藤誠司・淳于思岸　(2009)　神戸人眼中的汶川地震　張侃・張建新(編）災后心理援助名家談　北京：科学出版社　pp. 231-244.（同著者による英文論文 Wenchuan Earthquake in Our Eyes from Kobe の第三者による中国語訳）

Bartlett, F.C. (1932) Remembering: A study in experimental social psychology.　Cambridge:

Cambridge University Press. 宇津木保・辻正三　訳　想起の心理学　誠信書房　1983
クレイン、S.A.(2009)　伊藤博昭監訳　ミュージアムと記憶：知識の集積/展示の構造学　ありな書房
Gergen, K. J. (1994). Toward transformation in social knowledge. 2nd ed. London: Sage.　ガーゲン, K., J. 杉万俊夫・矢守克也・渥美公秀（監訳）(1998). もう一つの社会心理学：社会行動学の転換に向けて　ナカニシヤ出版
Halbwachs, M. (1950) La mémoire collective. Paris: Presses Universitaires de France. 小関藤一郎（訳）集合的記憶　行路社　1989
広井忠男（2003）越後闘牛ガイドブック 日本海文化研究所
星野亀吉(1954)　東山村沿革史　東山村公民館
今井信雄　(2001)　死と近代と記念行為：阪神･淡路大震災の「モニュメント」にみるリアリティ　社会学評論,51(4),412-429.
笠原一人･寺田匡宏　(2009)　記憶表現論　昭和堂
神戸市消防局、神戸市教育委員会　(2009)　神戸市防災教育支援ガイドブック（BOKOMI スクールガイド)（財）神戸市防災安全公社
Middleton, D. & Edwards, D. (1990) Collective remembering. London: SAGE.
Miyamoto, T., & Atsumi, T. (under review) Visualization of disaster revitalization processes: Collective constructions of survivors' experiences in the 2004 Niigata Chuetsu Earthquake. *Progress in Asian Social Psychology.*
宮本匠･渥美公秀･矢守克也(審査中)　アクションリサーチにおける「巫女の視点」　実験社会心理学研究
Neisser, U. (1982) Memory observed: Remembering in natural contexts. San Francisco: Freeman. 富田達彦　訳　観察された記憶－自然文脈での想起（上）（下）誠信書房　1988/1989
二十村郷牛の角突き習俗保存会 (1980) 二十村角突きとその習俗　新潟県古志郡山古志村教育委員会
大橋靖史・森直久・高木光太郎・松島恵介 (2002) 心理学者、裁判と出会う－供述心理学のフィールド　北大路書房
大島伊一（1998）天神ばやしのあれこれ　天神ばやしオンパレード実行委員会
小千谷市公民館（1977）錦鯉　発行所不明.
Pennebaker, J.W., Paez, D. & Rimé, B. (1997) Collective memory of political events: Social psychological perspectives. New Jersey: LEA.
災害復興制度研究所　(2009) サンタクルズダウンタウン復興計画(和文訳)　関西学院大学災害復興制度研究所
関口武三郎（1992）盆踊り考　出典不明.
鈴木牧之（1837/1997）　北越雪譜　小学館
高野尚子･渥美公秀　(2007)　阪神･淡路大震災の語り部と聞き手の対話に関する一考

察：対話の綻びをめぐって　実験社会心理学研究,**46**,185-197.
Wertsch, J. V. (2002)　Voices of collective remembering. Cambridge: Cambridge University Press.
山崎久雄 (1962)　二十村郷の山村発生　新潟大学教育学部長岡分校研究紀要,**7**,17-35.
矢守克也　(2009)　防災人間科学　東京大学出版会

Appendix 1:盆踊り音頭（よいようさ）

以下に示す歌詞は、塩谷集落の友野正人氏によって、集落に残されていた記録と小栗山地区で練習に使われている文書を総合して整理されたものである。筆者は、塩谷集落前区長などに歌詞の点検を依頼し、さらに、盆踊りに参加して、音頭取りの実際の歌を確認した。その結果、歌詞は正しいが、どの部分から歌い始めるかということについては、特に定まっていないことが判明した。古くは、“正しい”始め方があったようだが、現在では失われてしまったとのことであった。

私世間から今着きましてよーほー　　世間から今着きましてよ
私世間から今乗り込んでよーほー　　世間から今乗り込んでよー
はぁーりぁ出た出た物好き出たいよーほー　　出た出た物好き出たいよー
前の音頭取りーはどなたか知らぬよーほー　　音頭取りーはどなたか知らぬよー
声もいよいし唄の勘も上手によーほー　　声よいし唄の勘も上手によー
私ゃあのようにまねでもならぬよーほー　　あのようにまねでもならぬよー
私へただども音頭を語るよーほー　　へただども音頭を語るよー
唄って乗るやら乗らぬやらもしらぬよーほー　　乗るやら乗らぬやらもしらぬよー
唄って乗らぬとこ囃子で乗せてよーほー　　乗らぬとこ囃子で乗せてよーほー
唄って乗らぬとこ許してくりゃれよーほー　　乗らぬとこ許してくりゃれよー
さーて側衆さ囃子をたのむよーほー　　側衆さ囃子をたのむよー
さーて若い衆さ囃子をたのむよーほー　　若い衆さ囃子をたのむよー
よいこらさと足音高くよーほー　　よいこらさと足音高くよー
音戸とるとて別なことがなくてよーほー　　音戸とるとて別なことがなくてよー
音戸とりは側衆がたよりよーほー　　音戸とりは側衆がたよりよー
さーて音頭取りは囃子が頼りよーほー　　音頭取りは囃子が頼りよー
側衆さ囃子がたらぬよーほー　　ち側衆さ囃子がたらぬよー

（音頭取りが交代を頼む時）

私ゃ正直ださ声が嗄れましてよーほー　　正直ださ声が嗄れましてよー
あまり長いのは側の衆がよまずよーほー　　長いのは側の衆がよまずよー

どなたか跡継ぎたのむよーほー　　どなたか跡継ぎたのむよー
切れます跡継ぎたのむよーほー　　切れます跡継ぎたのむよー
さーて皆の衆さ代わりを頼むよーほー　　皆の衆さ代わりを頼むよー
ここで切れます、跡継ぎ頼むよーほー　　切れます、跡継ぎ頼むよー
（音頭取りが交代する時）
はーあーてがってんだー（新に音頭を取る人）
　　さーあーて頼みだー（今まで音頭を取っていた人）

さあーてここらで文句を語るよーほー　　ここらで文句を語るよー
囃子あるなら文句にかかるよーほー　　あるなら文句にかかるよー

（数え歌形式で）
一つ　日も良しお正月始めよーほー　　日も良しお正月始めよー
二つ　二日の晩の夢見が良くてよーほー　　二日の晩の夢見が良くてよ
三つ　三日の日にその夢かなったよーほー　　三日の日にその夢かなったよ
四つ　萬の宝を求めよーほー　　萬の宝を求めよ
五つ　いかほどに警護衆が増してよほー　　いかほどに警護衆が増してよ
六つ　睦まじくこの家の繁盛だよーほー　　睦まじくこの家の繁盛だよ
七つ　なーにかにと商いはじめよーほー　　なーにかにと商いはじめよ
八つ　山ほどに宝をつめばよーほー　　山ほどに宝をつめばよ
九で九つ 蔵まで建ててよーほー　　九つ蔵まで建て込みましてよ
十に　戸前まで詰め込みましてよーほー　　戸前まで詰め込みましてよ

新発田新町糸屋の娘よーほー　　新町糸屋の娘よー
姉の三七（二一才）妹の二八（十六才）よーほー　　三七妹の二八よー
姉の三七望がなくてよーほー　　三七には望がなくてよー
妹欲しさに御りょう願掛けてよーほー　　欲しさに御りょう願掛けてよー
掛けた御りょう願一二と読めばよーほー　　御りょう願一二 と読めばよー

一に　乙の大日様よーほー　　乙の大日様よー
二に　新潟の白山様よーほー　　新潟の白山様よー
三に　讃岐の金比羅様よーほー　　讃岐の金比羅様よー
四に　信濃の善光寺様よーほー　　信濃の善光寺様よー
五に　五泉の若宮様よーほー　　五泉の若宮様よー
六に　村上石動様よーほー　　村上石動さ様よー
七に　長岡の蔵王の町権現よーほー　　長岡の蔵王の町権現よー

八に　弥彦の御明神様よーほー
九に　国上の国上寺様よーほー
十に　栃尾の町秋葉の権現よーほー

伊勢へ七度　熊野へ八度よーほー
奥のお山へ九の度、十度よーほー

掛けた御りょう願叶わぬ時はよーほー
前の小川に身を投げ捨ててよーほー
前のお池に身を投げ捨ててよーほー
　三十三尋大蛇なりてよーほー
天に上りて血の雨降らすよーほー

今年は豊年だよ満作年だよーほー
秋のかたから福神様よーほー
福を招いてお出でござるよーほー
親父大黒、おかみさんが恵比寿よーほー
後の子供が七福神だよーほー

弥彦の御明神様よー
国上の国上寺様よー
栃尾の町秋葉の権現よー

七度　熊野へ三度よー
お山へ九の度、十度よー

御りょう願叶わぬ時はよー
小川に身を投げ捨ててよー
お池に身を投げ捨ててよーほー
三尋の大蛇なりてよー
天に上りて血の雨降らすよー

豊年だよ満作年だよー
かたから福神様よー
招いてお出でござるよー
大黒、おかみさんが恵比寿よー
子供が七福神だよー

Disaster Revitalization and Collaborative Remembering

－A case of Twenty-Village Summer Dancing Festival－

Tomohide ATSUMI

The present study examines how collaborative remembering affects disaster revitalization process. A series of Summer Dancing Festivals in Twenty-Village were described as a part of author's long-term collaborative practices in Niigata, where a devastated earthquake hit in 2004. First, the history and culture of the region called twenty-village were summarized, including the history of the festival. Second, a theoretical concept of collaborative remembering was introduced to analyze the festival and its effects on disaster revitalization. It was found that collaborative remembering led people to recognize not only their own shared past, but also their future. It was also suggested that collaborative remembering through physical performance (e.g., dancing) affected the revitalization process inter-locally. Future theoretical studies are invited to focus on inclusion of physical performance directly into group dynamics, while practical ones should make use of collaborative remembering as a tool of disaster revitalization.